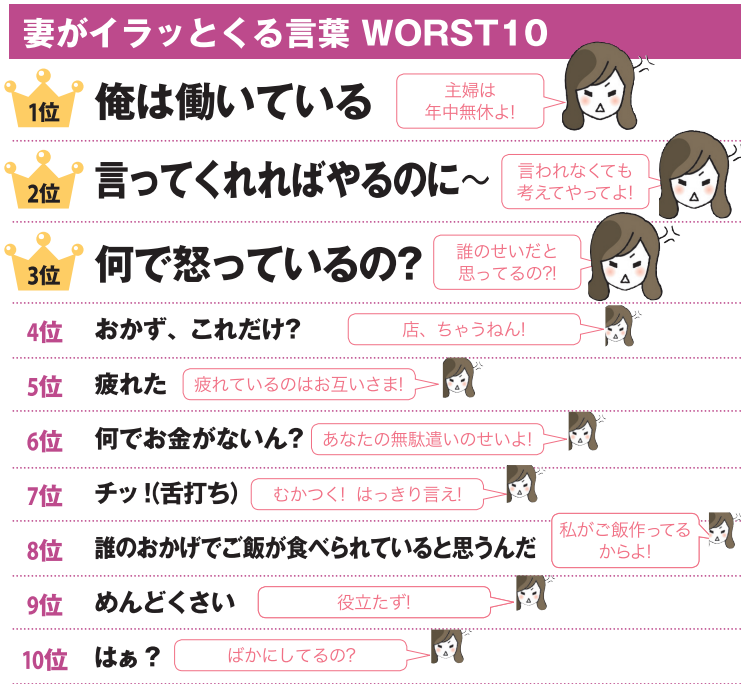


ちょっと待て！ その言葉が妻を刺激する！



家事や育児を、仕事と認めない夫たちも未だに多い。「昼間なにしてるの?」「俺が稼いでいるんだ」等々は刺激度MAXだ。ボディブローのようにこたえるのは邪気のない一言。2位の「言ってくればやるのに～」とか「手伝おうか?」等々。「他人事」気分がムカつく。一方、妻たちのこんな言葉に夫も傷ついている。「余計なことしないで!」「何回言ったらわかるの?」「また? (またやったの)」等々、気を付けてほしい。

ケンカにしないための「言い換え講座」

夫は「自分事」に、妻は大らかな気持ちで

夫

「手伝おうか?」⇒
「僕にできることはあるかな?」

「俺は働いている」⇒
「君にうちのこと全部任せっぱなしで
申し訳ないけど、今日は会社で嫌なこ
とがあって落ち込んでるんだ
(だから休ませてくれ)」

※家事や育児は共同事業だと分かっていると伝えつつ、要するに休みたいのなら別の言い訳を考えよう。

妻

「余計なことしないで」⇒
「ありがとう。
次はこうしてくれると
もっと助かるわ」

※自分の手順と違うやり方でも、まずはやってくれたことに感謝。今後もやってもらうためにも、おだてながら自分の手順を教え込もう。その際、なぜそうするのか理由を明確にする。男性は理屈が通れば納得するので。

夫婦が「恋人」から「同志」に昇華するか「同居人」に成り果てるかは、15年めまでの過ごし方次第だ。夫婦のすれ違いの実態を確認すると、妻の苛立ちの原因に、ある共通性が見えてくる。

ケンカの二大原因は「夫の生活態度」と「夫の性格」。これは夫の考え方そのものに潜む「俺は働いてる、家事育児はお前の仕事」という感覚に起因しそうだ。妻は「家事も育児も私だけのことじゃなく、二人の共同事業よ。なのにその他人事な感覚はナニ!」と感じる。妻たちが望むのは夫の参加意識。実際に育児を分

担したりはしなくても、他人事ではなく「自分事」として捉えてくれれば、ともに戦った「同志」と思えるのだ。

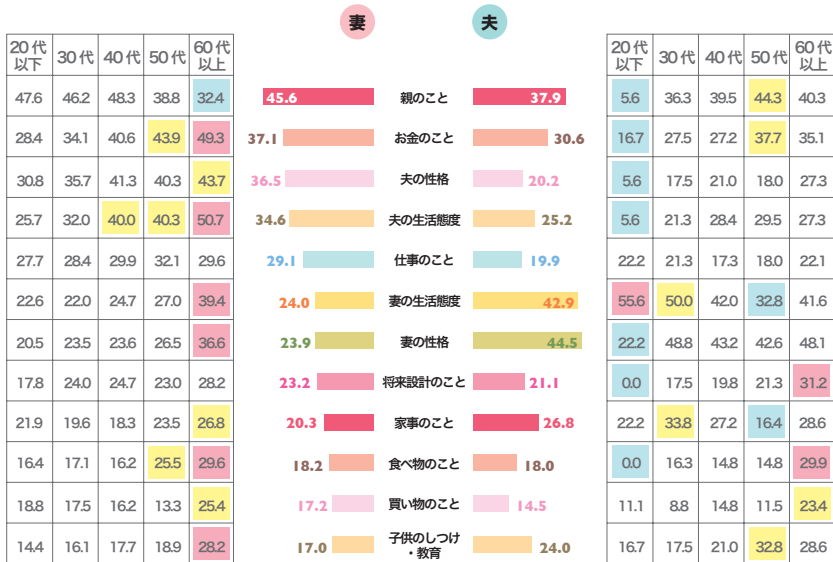
60代以上のベテラン夫婦に、いい関係を続ける秘訣を聞いたところ、共通のキーワードは「思いやり」と「楽しい食事時間」だった。感謝の気持ちや愛情を口に出して表現することが重要で、そのシーンとして食事中の会話を大切にしている。

子どもが巣立つ25年め頃に再び夫婦として向き合うためには、お互いのことを「自分事」として捉え、思いやりを表現する、これを意識的にしたほうがよさそうだ。

04 親のことはお互いタブー、60代以上になると妻は色々気を遣う

夫は、「親のこと」以上に「妻の生活態度」や「妻の性格」には触れないように我慢している。特に20～30代の若い夫たちの半数以上が「妻の生活態度」に触れないようにしているのは気の毒なくらい。妻も60代以上になると触れないことが急増する。

ケンカになるのでなるべく触れないようにしている問題は？

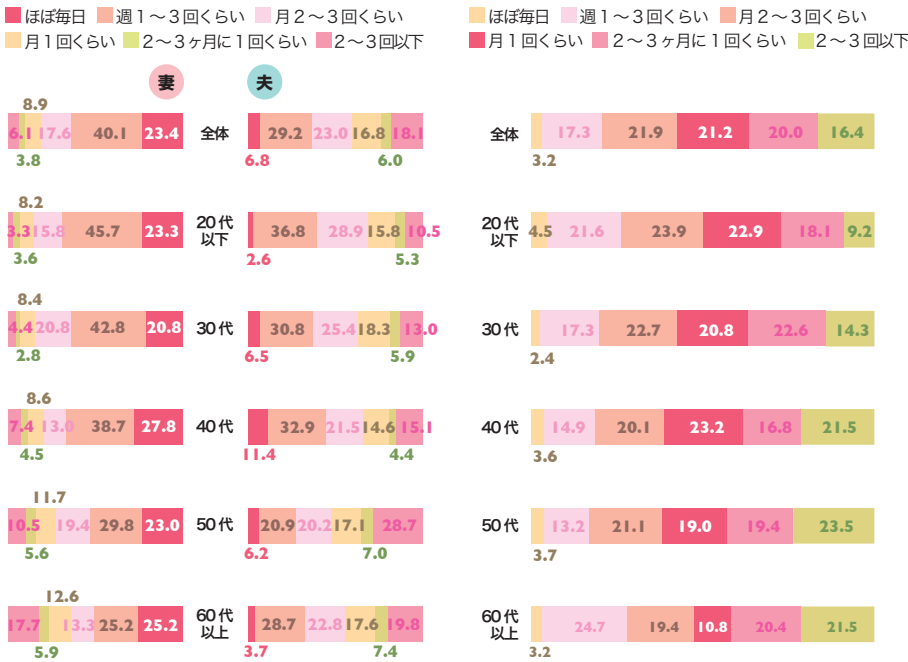


※年代別表で 平均より10%以上高い 平均より5%以上高い 平均より10%以上低い

02 妻側は4人に1人が毎日「イラッ」、夫は週1くらい

ケンカは少ないものの、妻の「イライラ」頻度は40代、50代でかなりキテイル。夫のイライラも40代がピークで、危険な年代だ。

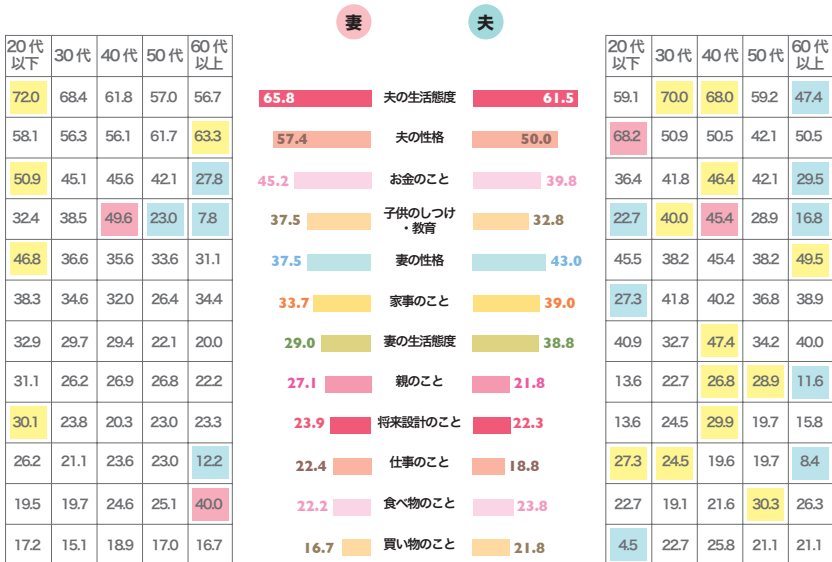
ケンカにはならないけれど、相手に対して「イラッ」とする頻度は？



03 夫の生活態度が最大の原因 40代は「子どもの教育」、60代は「食べ物のこと」が急増

全体で一番多いのは「夫の生活態度」と「夫の性格」で、どの年代でも共通。40代ではケンカの原因の捉え方も夫と妻にギャップが多い。60代以上になると「食べること」が生活の比重を占めてくるため、妻の被害者意識が強まるのか？

ケンカの原因は？



※年代別表で 平均より10%以上高い 平均より5%以上高い 平均より10%以上低い

妻の半数近くは「夫はストレスの原因」、4人に1人は毎日「イラッ」

気持ちのすれ違いはどこで起こるのか？

【調査概要】
調査期間 2009年8月27日～9月6日
調査方法 Web アンケート調査
※全国リビング新聞紙面で誘導
配偶者のいる女性 3,615人
年代別n数 20代以下＝550、30代＝1,602、40代＝932、50代＝394、60代以上＝137
配偶者のいる男性 642人
年代別n数 20代以下＝39、30代＝172、40代＝161、50代＝133、60代以上＝137